



— 第60号 —

〒214-8565
川崎市多摩区西生田1-1-1
日本女子大学教育学科の会
電話 044 (952) 6870 (代)
FAX 044 (952) 6889
ホームページ
http://jwu-gakuen.net/
メールアドレス
info@jwu-gakuen.net

第五十一回「大会」のお知らせ

日時：平成二十四年五月二十六日(土)

午後十二時三十分～三時三十分

会場：日本女子大学人間社会学部

A棟二階第一会議室

(西生田キャンパス)

大会日程

第一部 総会(午後十二時三十分～一時)

- ・会長挨拶
- ・平成二十三年度事業報告および各部報告
- ・平成二十三年度会計決算報告・監事報告
- ・役員改選・承認
- ・平成二十四年度事業計画・予算審議
- ・その他

第二部 第十六回「学縁の集い」

(午後一時～三時三十分)

参加される方へ

準備の都合がありますので、同封のハガキで五月九日(水)までに出欠をお知らせください。

西生田キャンパス(人間社会学部)のご案内

【小田急線】

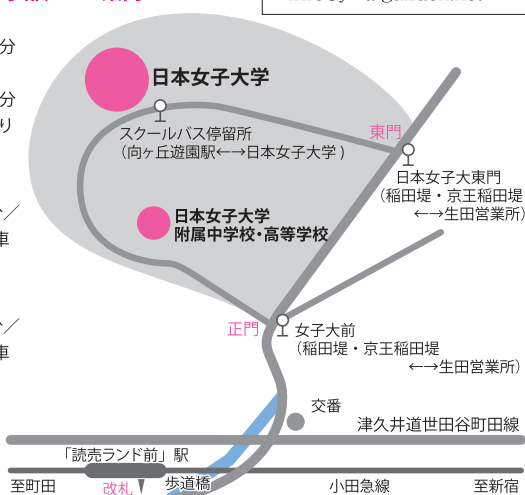
『読売ランド前』駅下車／徒歩約12分
新宿→読売ランド前／急行25分
『向ヶ丘遊園』乗り換え・準急30分
『向ヶ丘遊園』からスクールバスあり

【京王線】

『京王稲田堤』駅下車／
小田急バス(生田営業所行)約12分/
日本女子大東門または女子大前下車

【JR南武線】

『稲田堤』駅下車／
小田急バス(生田営業所行)約12分/
日本女子大東門または女子大前下車



学縁の集い

例年通り学縁の集いを開催いたします。教員、公務員、一般企業などの各分野で活躍している何人かの卒業生たちのスピーチを予定しております。

毎年、在校生にとっては職業選択のための具体的で貴重なアドヴァイスが得られる機会に、また、卒業生同士、教員と卒業生との懐かしい交流の場ともなっています。

新緑の美しい西生田キャンパスで、楽しい交流の時間を持ちませんか。飲み物とお菓子を用意します。

多くの皆さんの参加をお待ちしております。



提言 困難を組み替える知恵

教育学科准教授 藤田 武志

東京生まれの東京育ちの私は、十二年ほど前に雪深い新潟県上越市に赴任した。

はじめは大学の宿舎に住んでいた。冬になると、雪が降るたびに道を除雪し、車を掘り出さなければならなかった。憂鬱になっていたあるとき、同じ宿舎に住む年配の先生が、「雪かきはムキにならず、楽しみながらやるんだよ」と声をかけてくださった。積もった雪は、やみくもにすくい取って投げるのではなく、スコップで立方体に切り取って投げるのであり、より美しい立方体となるように楽しみながらやるそうである。

その言葉を忠実に守り、後に庭のある家に引っ越してからも、駐車スペースの前に積もった雪を、たまに素晴らしく美しくできた立方体にはくそ笑みつつ、黙々と汗をかきかき除雪していた。すると、その様子を見ていたお向かいの若いご主人が、雪かきはもつとゆるゆるとやるのだと教えてくれた。

私はスコップで雪を脇に投げて積み上げていたのだが、積み上がった雪がだんだんと高くなると、雪を投げ上げたのがしんどくなり、雪かきが終わる頃には疲労困憊だった。当のご主人は、除雪する雪を載せて雪上を滑らせながら移動させる「スノードンブ」という道具を用い、雪を遠い庭の隅まで運んで捨てている。確かにこのやり方だと、移動する距離は大きいが高く投げあげるよりも、ずっと体力の消耗が少ない。

しかもよく見ると、移動した雪で小さな丘ができており、スノードンブが滑った跡はスロープ状の道になっている。実はそれは、子どもがソリ遊びをする場所でもあったのだ。子どもが楽しめるようにスロープをカーブさせたり、うまくカーブを曲がれるようにスロープに傾斜をつけたりなど、子どもの喜ぶ顔を想像して楽しみながら作っているという。

このような「困難を組み替える知恵」を身につけ、さまざまなことに応用して人生を少しでも楽しいものにしていきたいものである。

退職される片桐先生に お話を伺いました



—先生にとって日本女子大で印象深かったことはなんですか？

十一年の在任期間のうち学部長だった四年間、特にエネルギーを使ったのはキャンパス移転の話です。施設もサークルも学園祭も、目白へ移転すれば大学全体が活性化する。自然の中で文化を客観的に見るということも大切だが、やはり若い時に多くの刺激を受けて、色々学んでほしい。そう思い、キャンパス移転の話を進めました。そして移転までの十年間、西生田で学ぶ学生にとって集いやすいキャンパスを作ることに努めました。例えば中庭、食堂。キャンパスというのは本来、集いの場所です。どんなキャンパスが学生にとって良いのかを思索することに携わってきたことが一番印象深かった。

—教員生活の中で大切にされてきた思いはなんですか？

学生に自分で自身の価値を発見できる人間に育って欲しいという願いです。そ



のためにも広い視野を持つてほしい。人は他人と比較することをしますが、目の前にいる人だけでなく、例えば文学や遠い土地への旅から、色々な人間の生き方を見てみる。すると自分は歴史の中で形作られているのだと分かる。人は歴史的存在です。「私」の悩みというのは、「私」だけで作られてきたのではない。そう考えると楽になる。自分はこうだと居直ることが出来る。自分を見つめるとともに、回りに目を向ける勇氣も必要です。本を読んだり、勉強をしたりするというのは旅にでると同じです。未だ見ぬ自分を自分の知らない空間の中で発見できる。だから私は学生に「旅」をしてほしい。「学び」というのは、「自分探しの旅」だと思ふ。大学はそれが出来る場であってほしいですね。

—これからの日本女子大、そして学生に一言お願いします。

日本女子大の学生はとていい学生です。真面目に人生を切り開こうとするひたむきさがある。大学四年間を真面目に過ごすことで得られるものは多い。振り返った時に、よかったと思えるはず。成瀬先生は建学時に、school for the student(学生の学校)と、自学自動主義ということを言っていました。女性は自ら学び得たものをどんどん「発表」し、大学は学生を支援していく。今もこの精神を日本女子大は色濃く残しているのです。この先さらに自覚的に大学と学生には受け継いでいってほしいですね。

芦野 恵理(2年 学生委員)

ホームカミングデイ 講演会の報告

昨年十月二十二日(土)、「ホームカミングデイ」が西生田で開催されました。藤田武志先生の講演後、三人の大学院生「教育学専攻博士課程」がコメンテーターとして参加するという形で、村上先生の進行のもと、和やかな雰囲気の中で行われました。なお、参加者は34名でした。



芥川さん
村上先生
藤田先生
加藤さん
武さん

藤田先生の講演内容

「子ども達は今、学校の中でどんな生活をしているのか?もし、息苦しい生活を送っているとしたら、一体それはどうしてなのか?」という事を様々なデータをもとに、インパクトのある具体的にわかりやすい内容でお話しいただきました。

まず最初に「学校で重要なものは?」という調査(フランス・韓国・アメリカ・日本の四カ国の大都市に住む中学生を対象)で日本は「勉強」「受験準備」「就職準備」等ではなく「友達関係」が格段に多く、また、日本の中学生を対象とした「学校で一番楽しいのは?」の調査でも「授業」「課外の部活動」等を抑え「友達と話したり一緒に何かすること」の割合が一番多い。

日本の場合、学校は友達と楽しむ場所として機能し、友達の重要性が非常に高い。これは良い面でもあるが、一方、学校で人間関係を失敗したら大変な事になるという人間関係至上主義の形で縛られている側面もあるのではないか。学校の中の子ども達は充足感と閉塞感が同居していると考えられる。

その閉塞感についてさらに①クラスの上下関係(スクールカースト)・クラス内地位(キャラ)②やさしい関係の二点から詳細なお話がありました。

次に「女子の一人称」に関する調査に基づいてのお話でした。神奈川県の中学生を対象とした調査では「ウチ」という一人称が多数派で、一人称の使い方人間関係の繋がりを確かめ合い、一人称は学校生活と結びついているのではないかと。

最後に次の四つの論点を提案されてコメンテーターのお話に繋がりました。

- ・ 友達関係至上主義
- ・ クラス内地位IIキャラ
- ・ やさしい関係をめぐる知見
- ・ 女子に見られる人間関係



コメンテーターのお話

★芥川元喜さん(小学校教員)

小学校でも友達関係は重点が置かれ、授業と児童理解が同じくらい比重を占めている。また、友達や教材と共感し合うという空気を集団で作っていくことが小学校教育でも行われているのではないかと共感しないことも一つの表現ではないか。

★加藤美由紀さん(中高一貫女子校非常勤講師)

少子化で親が子どもに目をかける割合が多くなつて子どもがやってもらう事に慣れている。これが友達関係にも影響しているのではないかと。

★武千晴さん(元大学非常勤講師)

学校から漏れている子どもの研究をし、自立援助ホームで実践していた。その時は地元で国立大学でも教えていた。その高い子どもは親の顔色を見るのに長けていて、これとやさしい関係は同じではないか。養育してくれる者との関係をもう一回、子ども関係の中でも再構築しているのではないかと思つた。

参加者からの意見

★「ウチ」という一人称は広く浅く誰でも受け入れてもらいたい造語ではないか。

★子ども達の中に多数派の論理、まわりの気持ちを読み取らなくてはいけない

という価値観が生じている気がする。

自分の中に倫理観を持つてほしいが日本の場合、育ちにくいのではないかと。(小学校教員)

★戦後、民主主義教育が入ってきた時民主主義をよくわからないままに教育してきたことに問題があるのではないかと。

★「アメイバビグ(仮想世界で遊ぶウェブサイト)」を親に禁止された子どもに学校で過呼吸、手の震えが起きた。コミュニケーションが取れない、一人になりたくないという不安から、こんなことが子どもの中に起こっている。(小学校教員)

★森田先生からフランスでは面白くなくても学校は勉強をする所という文化がある。学校が友達を作る場所になつたというあたりから子どもの病理現象が起こっている。面白くなく重要性を認めていない授業が学校生活のほとんどを占めている。学校で何を学ぶのか、カリキュラム論までいかなないと病的に対症療法でいろいろなる事を考えても解決しない問題。

まとめ(藤田先生より)

子どもの問題は大人の問題であり、息苦しさ・生き辛さを何とかしようと思つて、子ども達は一人称や人との関わりを工夫して必死に生きている。子ども達なりにやっている結果でありその背後には学校の事をもつと考える大問題がある。

参加者のアンケートから

★学校が子どもにとつてどのような役割を担うべきなのか、担えるのかという事を考え続けました。本日の会はとても勉強になりました。教員の皆様のお話はとても興味深いものでした。学校は子どもの生活の場であることは事実です。そこでやはり、その生活の質を考えなければならぬと思います。子どもは学校で勉強し、その学習・活動を通して様々な経験・関係づくりを行っていくものです。学校を組織している、カリキュラム・教員の指導等から、学校という子どもの生活の場を再構築していく必要があると思います。

★とても興味のあるお話で分かりやすかったです。いろいろな現代の問題を含んでいると思います。勉強になりました。参考文献の本もぜひ読んでみたいと思います。

★小学校の現場で子ども達を見ていて何となく変だとか問題を感じている事が統計的にあらわされ、お話の中でまとめられ納得できとても勉強になりました。

★分かりやすく楽しい講演でした。やさしい関係、共感圧力とか興味深い話を聞かせていただきました。卒業生の意見も活発に出て、全体で考えられる講演でした。

★会場内のディスカッションの時間が短く感じるぐらいさまざまな意見が出て充実したホームカミングデイになりました。

米田佐代子先生懇話会の報告

—青鞥百周年を記念して—

「自然」の教育をめぐって

昨年、青鞥発刊百周年にあたりまして、十一月十九日(土)、桜楓会館に米田佐代子先生(NPO平塚らいてうの会会長・らいてうの家館長)をお迎えして懇話会を行いました。

二〇〇九年に続き、二度目の懇話会でのお話でした。雨の中、参加された方々は、らいてうの生きた時代が目に見えてくるような先生のお話、熱心に耳を傾けていました。



『昨年、私たちは、東日本大震災、それに続く原子力発電所事故を経験した。その結果、戦後信じられてきた文明社会のあり方が問い直されている。このような時こそ、「教育にとつて自然とは何か」について考えることが大切ではないだろうか。』

文化部 日隈 千恵子(24回生)



「自然」という言葉には、二つの意味がある。一つは、豊かな自然に恵まれた中で教育する「環境としての自然」である。もう一つは、人間が生まれ育つていく過程を自然と見なす「自然としての人間」である。そこで、「平塚らいてうの生きた時代と教育」を振り返ることにより、「教育にとつて自然とは何か」を考えてみよう。

とお話を始められました。



らいてうは、一八八六年(明治十九年)、日本が西欧諸国に追いつこうと近代化を推し進める中、東京の麹町に生まれ、明治政府の役人として「文明開化」を担った父と、江戸時代の雰囲気を持った母や祖母のいる家庭で育った。時代は、日清戦争を経て、日露戦争へと向かっており、国家主義的教育や、家父長制を支える良妻賢母教育が行われていた。これに反発したらいてうは、官立ではない日本女子大学校に進学、禅と出会うことで心の自由を得た。一九〇八年、森田草平との「塩原事件」の後、信州松本に滞在。一九一二年、『青鞜』発刊。一九一四年に奥村博(史)と共同生活を始め、第一次世界大戦中の一九一五年に最初の子を出産。一九一九年、新婦人協会に拠って婦人参政権運動。その後体を壊し、夫と二人の子とともに療養生活に入った。

らいてうが子育てをした大正時代には、ルソーや西欧の教育思想に影響された自由教育運動が広まっていた。これは、子どもが受け身ではなく、自分で考え、自主的に学んでいくことを目指す教育であった。このような時代に、らいてうとやはり『青鞜』に参加した富本一枝(尾

竹紅吉)の二人は、同時期に子どもを産み、子どもたちが学齢期になった時、それぞれ特徴ある子育てをしている。

らいてうが栃木県佐久山で子育てをしていた頃、子どもたちは土地の子もたちと泥んこになって遊んでいた。学齢期に入った長女は、佐久山尋常小学校に入学している。その後も塩原温泉や伊豆山で暮らし、自然の中で子どもを育てることを望んでいた。そこには山や草木など「万物に神がいる」とみる自然崇拜の気持ちや、「肉体は滅んでも魂は無限につながっている」といった生命観があったと思われる。東京に戻ってから公立の学校で国定教科書を使うことに反発、子どもたちを自由に伸ばす教育を行っていた私立の成城学園に通わせた。

一方、一枝は、陶芸家の富本憲吉と結婚し、憲吉の実家がある奈良県安堵村に居を構え、二女を設けた(のち男の子誕生)。憲吉と一枝は、モンテッソーリの教育法に惹かれ、子どもが学齢期になると地元の小学校ではなく、二人のために「小さな学校」をつくり、理想とする教育を行った。また一枝は、英語、音楽、理科などの教科については、二人の子どもを、当時自由教育運動の中心であった奈良女高師付属小学校に、毎週のように連れて行って学ばせた。

らいてうは、一枝の住む安堵村を訪ね、その理想に感動しつつも、「自分の子どもたちは野山を駆け回り、土地の子どもたちと泥んこになって遊んでいる。子どもには友達も必要ではないか」と書いた。らいてうもルソーの影響を受けたが、「子

どもは自然の詩人。子どもはそれ自身(善きもの)であり、生まれながらに良いものを持つている。大人が余計なものを与えてはいけない。教育は(与える)ものではない」と考えていた。ここに、らいてうと一枝の教育観の違いが見られる。

両親の思う理想的な教育を受けた一枝の子どもたちは、後に、「囲いが厚ければ厚いほど、風通しが悪かった」と複雑な思いを述べている。もつとも、憲吉・一枝も、決して子どもを隔離しようと思っていた訳ではなかった。「小さな学校」は、県から正規の教育課程として認定され、夫妻は東京の文化学院のような学校設立を望んでいたという。二人には、「ルソーなどに代表される西欧の理想的な教育が、日本は公立の学校では行われていない。子どもはあらゆる可能性を秘めている素晴らしい存在であり、それを伸ばすのが親のつとめである」という思いがあり、草深い農村で自ら「小さな学校」をつくったのである。

「小さな学校」で子どもに一番良いと思う教育をした一枝。「人間のいのちは自然に生まれ、自然に成長し、自然に土に帰っていく」との思いから、子ども自身の伸びる力を信じたらいてう。どちらが正しいということではなく、女性が自立の道歩くことが認められていなかった時代に自由を求めて闘い、母となり、大正デモクラシーに出会い、「子どもにとつて一番よいものは何か」を迷いながら試行錯誤して選んだ教育には、子どもを自由な人間として育てたいという共通の精神があった。

らいてうの「自然の教育」とも言うべき姿勢には、ルソーなどの西欧の教育思想の影響だけではなく、一九〇八年の「塩原事件」の後、揺れる心を抱いて信州に滞在、自然のなかで自分自身を取り戻していった経験や、禅でつちかかった世界観が影響していたと思われる。「かつて人は山や森、太陽にひざまずいた」という自然への畏敬の念や(いのちの無限生成)を信じる生命観など独特な思いがあつて、教育に対しても独自の姿勢が生まれたと思う。

今、教育とは何か。子どもたちに何を与えていくのか。良かれと思うことでも子どもに押し付けてよいのか。教育の課題を考える時、らいてうや一枝の子育ての経験を参考に考えていくことが大事ではないか。

* * * * *
先生のお話を拝聴し、親として子どもにどのような教育を与えるのが良いかを考える必要性を感じました。

参加者からの感想の一部を紹介します。

☆平塚らいてうの名前を知っている世代の私、興味があつての出席でしたが、「教育、家庭、母、人」世代を超えて普遍であると思いました。

☆いつの世も子育ては、楽しいとともに大変だと思えます。自分の子どもには人に優しく、反対に、いじめられたら強く生きて欲しいと、親はずいぶん勝手なことを考えてしまいます。平塚らいてうと富本一枝の子育てを、いろいろ興味を持って伺いました。



石橋 厚子さん (32回生)

石橋さんは、1982年3月に教育学科を卒業。在学時には、梶田先生のゼミに所属し、教育心理学を専攻、在学中に、幼小の教員免許を取得。卒論は「認知的不協和」をテーマにして書かれたそうです。

卒業後、川崎市内の私立高校の図書館で、3年の司書の経験の後に、新聞社の文化事業部にお勤めになりました。

その後、一人目の娘さんのご出産を機に退職、そして学研の教室を開室。以来、先生務めも今年で17年目。現在では、幼児から小学生までの子ども達を対象として、週5回開講しているそうです。

二人の娘さんの母親として子育てをなされる傍ら、学習塾の先生としての顔をもつ石橋さん。

これまで石橋さんが、どのように家庭と仕事の両立をはかってこられたのかを中心に、石橋さん流子育ても交え、お話を伺いました。今回は、石橋さんが開いているご自宅の教室にお邪魔して取材させていただきました。

★学生時代はどのように過ごされていましたか。

学校生活では、サークル、アルバイトの思い出が濃いですね。サークルは、スキー部とテニス部で活動しました。学校の授業では、特に教職の科目に熱心に取組んだという印象が強いですね。

アルバイトは色んなものを経験しました。家庭教師に始まり、学校の授業についていくことが難しい子ども達のための塾の講師、また歯医者さんで受付のアルバイトもやったことがあります。こうした学生時代の様々なアルバイトは、たいへん貴重な経験でした。

★学生時代にやっていた塾などのアルバイトの経験が、学習塾を始めるきっかけとなったのでしょうか。

直接のきっかけは長女が小学校へ入学したことです。

娘が小学校に上がって勉強するということで、良い教材を与えたかったんです。これが大きなきっかけですね。

★娘さんへの想いからはじめられたのですね。当時、娘さんも小さかったと思うのですが、家庭との両立いかがでしたか。

大変なこともありましたがね。でも、学研教室が自宅で行えたこと、近くに母が住んでいたことは力になったと思います。教室を開いているときは、娘を預かってもらっていたこともありました。

★ご家族の協力もあつたんですね。お子さんの子育ての経験や、塾でのお仕事を通じて、石橋さんが大切になさっていることは何でしょうか。

私が一番大切にしたいことは、知識とかそういうものでない、心とか生きていく強さとか・・・確かに競い合う中で能力を高めることも大切だと思います。でも私は、それ以上に、一人一人の子ども個性を認め、自信をつけて送り出してあげることが必要だと思います。その子の良さをのびしてあげる手助けを大事にし続けたいと考えています。

◆感想

今回の取材を通して、ワークライフバランスの難しさを痛感しました。お話の中で一番心に残ったのは「それは、娘さんから、「教室を開いていた時、寂しかったよ。」と言われたというエピソードでした。この子どもから寄せられた素直な言葉には、考えさせられるものがあります。私自身、この教育学科の授業を通じて、幼少期の子どもにとって、いかに母親の愛情や母親の存在が身近にあることが重要かということを感じました。自分の将来のキャリアを考える際、今回、ワークライフバランスに関して、このようなリアルティある視点を頂けたことに感謝します。

教育学科の会ホームページ

サイト名:「学縁」
<http://jwu-gakuen.net/>
日本女子大学公式ホームページから、
教育学科→学縁にアクセスすることもできます。



日本女子大学 教職教育開発センター

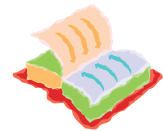
登録をすると、メールマガジンが届きます。
カモミールnetマガジン(2011年7月より毎月1回発行)
<http://www5.jwu.ac.jp/laboratory/kyoshoku/>

石橋さんの大切にされている教育理念は、現代の日本の教育において最も必要とされていることの一つだと思います。子ども個性を、ありのまま受け止める。子ども達の個性には優劣なし。そのままの子どもを愛してあげる。私は、石橋さんの子ども達に対する温かい姿勢から、このようなメッセージを受け取りました。

最後に、突然の取材に快く応じて下さった石橋さんに、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

君島 由紀(2年 学生委員)

東日本大震災 教育学科の会として



昨年三月の大震災から一年が経ちました。これまで、被災された方のために教育学科の会として「何かできることはないか」と考え、行なってきたことをご報告いたします。

会としては、「葦59号」でご報告のとおり、まず総会の時に行なった募金で集まった寄付金(25,200円)を「セーブザチルドレン」に送り、次に「桜楓会」に義援金(500,000円)を送りました。桜楓会を通じて迅速で、きめ細かい被災地支援の様子は「桜楓新報(691号)」に詳しく掲載されています。

また、被災して孤児・遺児となった子ども達の学資として「桃・柿育英会」に毎年20,000円を十年間継続して寄付するという事に決定し、手続きを行いました。

その後も回生委員会や学科の会理事会で更にどんなことができるか、話し合いを続けてきました。その結果、福島県相馬市在住で三年前に回生委員会で講演をしてくださった新妻香織さん(34回生国文科卒)に「子ども達や教育のために」という趣旨で義援金(300,000円)を託すことに決めました。新妻さんはNPO「フー太郎の森基金」の代表としてアフリカの緑化と水資源開発のために活動しているのですが、震災後は地元での復興に取り組んでおられます。会としては、今後も連絡を取り合っつながらを持ち続けたいと考えています。

被災地の状況は日々変化しています。

それに応じて支援の方法も変わらなければなりません。義援金や支援物資が届き、新たな生活が始まって、むしろ悲しみや喪失感がより大きく深くなってきたという声も耳にします。

これからは、会としてまとまって力を発揮するだけではなく、私達ひとりひとりが困難の中にある方々に心を寄せ、考え続けることが求められていると感じます。教育学科で学んだ私達や現在学んでいる学生だからこそ、という支援もあるかもしれません。

皆さんのご意見や会員の情報などをぜひ「教育学科の会」宛にお寄せ下さい。(同封のはがきでもメールでも構いません。)よろしくお願ひいたします。

副会長 大森 桃子(26回生)



会員の広場

今回は、返信のハガキに大震災後の近況を書いてくださった高橋道子さんと、最近よく見かけるようになったローフードについて二田洋子さんに、原稿をお願いしました。

かけがえのない繋がり

60回生 高橋 道子

女子大を巣立って、二年が経ちます。教師という同じ職で奮闘する仲間。厳しい就職活動乗り越え、企業で働く仲間。女子大での四年間、共に笑い、共に悩み、共に学んできた仲間が、それぞれの道へ前へと踏み出しています。

私も、関東で頑張る仲間刺激を受けながら、地元・岩手(遠野市)の地で小学校教員として、日々奮闘しています。関東からは遠い岩手なので、なかなか女子大の仲間に出会うことができなくなりましたが、女子大で出会ったかけがえのない仲間の繋がりや絆は、どんなに離れていても、消えることはないのだと強く思います。

そう改めて感じたのは、東日本大震災のときです。三月十一日、私たちは、信じられない体験をしました。私の住む岩手県・遠野市は津波による被害はありませんでしたが、日常生活を取り戻すには、数ヶ月かかりました。ライフラインが全て止まり、寒さと食料不足で一日を過ごすのがやつとの状況でした。電話も繋がらず、安否確認を知らせるまでに一週間もかかりました。

やつと電話が繋がるようになり、携帯の着信履歴やメールに、ゼミの恩師や仲間から安否確認のメッセージが何度も入っているのに気づきました。目の前の「非日常的な今」を生きることに必死な中、「日常の今」をふと思ひ出させてくれる瞬間でした。ひとりではない、みんなが心配してくれている、この状況をなんとかして乗り越えなければという強い力をもらいました。

大きな余震でたびたび停電が起こる中、平成二十三年度の新学期がスタートしました。私の赴任する遠野市は津波被害の大きい沿岸部に近いので、沿岸部からの転入生を多く受け入れました。

大人でも余震の度に、あの時の記憶が蘇り心臓の鼓動が激しくなりました。ましてや、恐怖感や失望感を経験した子どもたちの心には、大きな傷ができ、トラウマのように、余震におびえる様子がありました。学校の中ではいつもと変わらない笑顔を見せる子どもたちが、余震が来るたびに敏感に反応する姿を目の当たりにし、本当にかわいそうに思っていました。



日常生活を取り戻しつつあったころ、突然、絵本と指人形が贈られてきました。「子どもたちの心が安らぐ時間を少しでもつくれますように」というメッセージが添えられていました。贈り主は、ゼミの恩師でした。

それだけではありません。三日、一週間と定期的に、ゼミの仲間から励ましのメールが幾度となく送られてきました。「元氣?余震は大丈夫?欲しいものがあつたら、何でもいってね。」「今日、街頭の義援金箱に募金したよ。これくらいしかできないけれど、私にできることは何でもやっていくよ。」決して「頑張つて」という言葉はありませんでしたが、私のことを気遣い、応援してくれる仲間の思いを感じました。

女子大で生まれたかけがえのない繋がり、目に見えるものではありませんが、今もなお強く強く私たちの中にある

のだと思います。これから先もずっとこの繋がりには、強くなつて続いていくことでしょう。

ゼミの恩師や仲間をはじめとして、皆様の温かいお心遣いをいただき、本当に感謝申し上げます。ありがとうございます。



ローフードとは

38 回生 二田 洋子

出産後、会社に勤めながら、かねてから興味があったアロマトリートメントを勉強し、『心身ともに健康で美しく』をモットーに自宅に自分のサロンを持つことが出来ました。お客様と接する中で、トリートメントだけでは補いきれないものが毎日食べる食事に隠されていることを痛感し、現在は同時にローフード&リビングジュースを取り入れる啓蒙活動も行っております。ローフードとは **raw food** (生) Food (食べ物) のことです。自然の食材を加熱しないで生でたべることにより、野菜や果物に含まれる生きたビタミン・ミネラル・ファイトケミカル・酵素などの栄養素を体に取り入れ、心身の健康を取り戻す食事法です。私自身学生時代より12キロほど体重も落ち、卒業から20数年たちますが学生時代からは考え



られないほど元気に毎日とび回っております。聞きなれない『ローフード』という食事法ですが、心に留めておいて頂き機会があれば触れていただければ嬉しいです。

E-mail to_heart789@yahoo.co.jp

ハガキコーナー



(※・・・)は編集部挿入です

◆11月19日(※米田先生懇話会)は、日本女子大創立百十周年の会合と重なり残念です。来年こそ?と思っております。いつもご連絡嬉しく拝見しております。会のご発展を心より願っています。

4 回生 山本 和代(東京)

◆いつか出席できる日をたのしみにしております。(駐車場が使えると便利なのですが) 8 回生 小出 とし子(東京)

◆若年性認知症の夫と同居しながら気ばかりつかう毎日です。1年間に1回(3~5日)は入院をしています。心が身体に与える影響のものをすこさを味わっています。 12 回生 押田 計枝(千葉)

◆教育学科のおたよりを楽しく読ませて頂いております。現在、成瀬仁蔵研究会と婦人国際平和自由連盟(WILPF) 日本支部に入会し活動しております。教

育学科の方々のご参加を願っております。 14 回生 上田 和子(東京)



◆18 回生は、65歳をむかえています。卒業後、九州大学大学院博士課程を修了して、大阪大学助手、関西国際大学、京都光華女子大、大阪大学人間科学部を定年退職し、現在甲子園大学で心理学部を立ちあげて、初年度を迎えています。

18 回生 藤田 綾子(兵庫)

◆千葉県松戸市、市川市で有料老人ホーム、グループホーム、小規模多機能型居宅介護、デイサービス、訪問介護、居宅介護支援等の事業を経営しています。利用者の皆様から感謝され喜んでいただけことが、最高のモチベーションになります。と同時に百人余の従業員の就労満足度を向上させることが最大の課題です。 21 回生 久保 柴の(千葉)

◆桜楓会、WILPF(婦人国際平和自由連盟)で活動しています。WILPF 日本支部は、目白キャンパス成瀬先生旧宅内に事務所があり、(火)(木)はオープンしています。目白にお出での節はお立寄りください。14 回生上田さんと「婦人と平和」の編集を担当しています。目白祭に展示ブースを設けます。

25 回生 高崎 方子(埼玉)

◆今年、高校を卒業してはや40年になるそうです。4年後は大学を卒業して40

年になるかと。母校教育学科へ、心から感謝しております。皆様どうぞご活躍を。 26 回生 高桑 厚子(東京)

◆組合の女性部の役員をしています。今年初め、役員6年目にしていつしよにやっている人が教育学科の卒業生と知りびっくりするやらうれしいやら、意欲も高まり絆も深まりました。

26 回生 早船 智美(東京)

◆4月から校長職に就いています。教職を目指している現役のみなさんに何かお役に立つことがあればご連絡下さい。

27 回生 井出 真理子(東京)

◆夫が定年を迎え、主夫して居ります。私はあと十年程仕事を続ける予定で、逆転した生活にとまどいつつ、楽しく過ごしています。 28 回生 笠井 幹(東京)

◆いろいろとお世話になりました、ありがとうございます。

29 回生 雨田 智重子(兵庫)

◆新任の藤田先生のお名前、大変懐かしく拝見いたしました。先生の東大院生時代にコース事務室に勤務致しております。(教育学部学校教育学科研究室)で、この3月に閉室となるまで事務職として勤めておりました。藤田さん、いえ藤田先生のみますますのご活躍、心よりお祈り申し上げます。

29 回生 藤宗 直子(神奈川)



◆卒業して30年以上たちます。5年ぐら
い前に、(＊ホームカミングデーに)出
席させていただきました。両親の介護、
子育てと忙しい日々を送ってきまし
たが、子供も学生、母は亡くなりました
が、父は90歳。主人や周囲の方々に支え
られここまでこられたと思います。久し
ぶりに出席させていただいて、またエネ
ルギーをいただけたらと思います。

30回生 米山 奈加子(東京)

◆皆様のご活躍とご健康をお祈り申し上
げます。先般(朝日)新聞紙上でも取り
上げられました、女性に多い病気の「線
維筋痛症」。これにつき合い、クリニッ
クに通い、2年半前から服薬中です。軽
い方ですが、「筋トレ」も必要です。

31回生 橋元 隆子(東京)

◆今年度いっぱい、我家から学生がい
なくなり(はずです：笑)。子ども
を社会に送り出す！という喜びと淋し
さ、安心感と不安な気持ち・・・複雑な
母の私・・・でも！まだまだ人生は長
い!!楽しみます♪

33回生 竹内 さち子(東京)

◆毎回楽しく読ませて頂いております。
有難うございます。皆様のご多幸をお祈
り申し上げます。

38回生(山梨)

■本年(＊平成23年)3月をもちまして、
専任を解かれ、あとは非常勤講師として
本来の社会科・公民科教育の授業を担当
しています。長いことお世話になりました。
佐島 群巳(東京)



クロスワードパズル

二重枠の4文字を組み合わせて
できる言葉は?

1	2	3	4	
5				
6			7	8
9				
10			11	

解答を同封のハガキに書いて送ってください。
正解者の中から抽選で10名に図書カードを贈呈します。

■前号の正解は<シジミ>でした

応募者は19名。たくさんのご応募、ありがとうございました。

【当選者発表】(敬称略)

丸山淳子(17)・永原美津枝(18)・清水範子(18)・北村博子(20)・早船智美(26)
橋元隆子(31)・石橋厚子(32)・青山朋子(38)・中西輝子(38)・牛窪紗矢佳(56)

<ヨコのカギ>

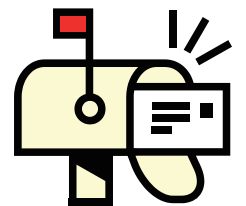
- 1 今年はロンドン五輪。4年に1度の〇〇〇〇〇
- 5 園城寺の通称
- 6 〇〇麗句
- 7 〇〇を省いて、今年も節電・節約
- 9 北のアングロアメリカ、南の〇〇〇アメリカ
- 10 五輪で、目指すは〇〇メダル!!
- 11 鳴門の〇〇潮は、春と秋の大潮の時に最大に

<タテのカギ>

- 1 沖縄でひとあしお先に〇〇〇〇〇
- 2 相違点の反対は?
- 3 立つ・鳴る・振るう、体の一部は?
- 4 ビートルズ、リンゴ・スターの担当は?
- 8 きな粉も枝豆も元はコレ



締め切り：5月9日(水)



＊編集後記

◇先日、思いがけないところで「知
人の知人」に遭遇しました。人と人
との出会いは奇跡のようで、でも必
然のようで、不思議なものです。

石井 美奈子(38回生)

◇葦編集も、もう7年目。今年こそ
次の人にバトンタッチしたいので
すが・・・。時間に余裕のある今
よりも、仕事や家族が大変で、超多
忙だった時のほうが、上手に時間を
使っていたような気がします。

大熊 智恵美(34回生)

◇「春は別れと出会いの季節です。」
と長年親しんできましたが、秋に移
行するのでしょうか? 東大など
12大学が秋入学を進めようとして
います。実現するとしても当面は一
部大学でしょうし、どちらかに定着
するまでは春と秋の年2回になり
そうですね。

高橋 藤枝(23回生)

◇東日本大震災から1年が経ちま
した。会員の皆様は現地へのボラン
ティア活動、義援金、支援物資・・・
その他、諸々な形で関わりを持たれ
たことと思います。忘れずに息長く
支援し続けていきたいと思えます。

北島 幸子(23回生)

